

---

# 学園内最強組織 ~ the past ~

飛楽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学園内最強組織\the past\

### 【Nコード】

N7451N

### 【作者名】

飛楽

### 【あらすじ】

前投稿した「学園内最強組織」

(<http://ncode.syosetu.com/n1925n/>)の過去の話です。

前回を読んでも読んでいなくとも分かります。  
これも結構早く終わります。

少年は同じ景色を繰り返す毎日が嫌いだ。特段不便な生活をしてるわけでもないし、いじめられてるわけでもない。

ただ、何気なく過ぎ去っていく日々が、どうしようもなく退屈だった。

某出版社の某ノベルとかぶるかもしれないが、少年は日常からの奪還を夢見ていた。つまりは非日常。

しかし少年は、何かを作ったわけでもないし、寄生されてるわけでもない。

ましてや知り合いに変な人や、異形もない。

いたって普通の人間だ。逆に普通すぎるくらいに。

少し普通と違うのは、空手の全国3位ということだろう。

こんなことは仲の良い友達と家族しか知らないが。

少年は中学3年生。すなわち受験生なわけだが、上にも書いた空手の特待生ということで受験勉強なんてしていない。他の人がうらやむような中学最後をエンジョイしているはずなのだ。

しかし求めるものは非日常。

しつこいが、非日常なのだ。

そんなもの待っていてもやって来るはずは無いと始めた空手も、もつつまらない。

彼は、ただの日常が嫌いだった。



「おい！聞いてんのか！このガキい！！」

少年は、たぶん絶対絶命といつていい状況に陥っていた。その実感かわいてこないのは、さつきから目の前にいる男達が発しているこの言葉にあるんだろう。

「さつさと財布の中身だせてんだよ！」

（まだいたんだね、こんな人たち）

これもまた、彼の求める非日常なのだろうが、そこまでは頭が働かない。頭の中は、どうやってこの場を切り抜けるか、でいっぱいだ。

まだ、真っ白にならないだけ、冷静だろう。

走って逃げればいいのだろうか、足は言うことを聞きやしない。根が生えたみたいで、重たくて、持ち上がらない。中学生男子として、あたりまえ。怖くないと言ったらウソ。

（第一、何でこんなことに…）

それは数時間前にさかのぼる。

ある日曜日のことだった。

少年は夜、もう10時を回ったところ、シャープンの芯が無いことに気づき家を出た。夜中出かけることも珍しくないため、親も何も言ってこなかった。ただ、すぐそのコンビニに行くだけ。日常では、何も無い、当たり前のこと。

日常では。

その日はどうも何かあつたらしく、いつも通る大通りが封鎖されていて、しかたなく人気のない裏路地を通つた。すると、その辺りを縄張りに行っているグループがあつたらしく、入って初めの角を曲がつたところで囲まれた。ただの一般市民だと分かると、通行料に財布の中身を全て置いて行けという。

そして、今に至る。

（ああ。こんな奴らまだいたんだね。漫画とか、アニメの中だけじゃないんだ。）

少年の頭の中は冷静でも、体は言うことを聞かない。つまりは逃げられない。

元から運動神経はいい方ではない。（真ん中くらい）

「ったく。だんまり決め込む気かよ」

（そんなつもりないんだけど）

口の中だって、からからで声なんてかすれて出やしない。「やっちまえば？」

耳をいたがう言葉が聞こえ、少年は一層体を固くする。

「そうすつか」

（え。まじで？）

「え……」

「ん？なんか言ったか？」

「いいよ、やっちまえ！」

かろつじて絞り出した声もあっけなく無視。

と、一番目の前にいた男が大きく拳を引いた。

「……」

「なんで？」

「なんで、僕が残ってるの？」

少年は立っていた。

男たちの倒れる中、立っていた。  
傷一つなく、立っていた。

「あんなに怖かったのに」

「あんなに逃げたくて仕方なかったのに」

「なんで僕が勝ってるの？」

少年は怖くなって走った。

ただ、家を目指して走った。

後ろから、ほかの男たちの声が聞こえたが、構いはしない。  
たぶんさっきの奴らの仲間だろうから。

物陰から、一人、目を輝かせて、見ている影。  
影は誰にも見られず、ずっと消えた。

### 3（後書き）

駄文ですが、評価していただけると嬉しいです。

少年は家につくと親なんか無視して自分の部屋に飛び込んだ。思いつき閉めたドアを背にしてしゃがみこむ。

はあ、はあと自分の息切れがうるさい。

うすうすできるかな、とは思っていた。

なんせ自分は空手が使える。

その辺のチンピラと同等かそれ以上くらいの喧嘩の腕は持っていると思っていた。

空手をはじめたのだって、そういうのができるようになれば少しでも非日常に近づけるかもしれないと思ったからだ。

しかし、実際やってみるとそれは気持ちのいいもんなんかじゃない。

空手の試合とは違う。

相手は刃物を持っていた。

あのときは何とかかわしたが、下手すれば死んでいてもおかしくは無い。

まあそこまでは向こうもしないだろうけど。

ただ、威圧感というか、そういうものがあつて。

とりあえずまだ中学生の少年は底知れない恐怖を感じた。

心から、恐い。

そう思ったのだ。

だからこそ、そんな中で本能的に動けた自分がもつと怖かった。ほとんど無意識に、手を出してしまったのだ。

自分が求めていた非日常はこんなものじゃない。  
こんな喧嘩するようなのじゃない。

（なら、僕は何を求めていた？）

いつの間にか落ち着きを取り戻し、少年は考える。

しかし、答えは出なかった。

#### 4（後書き）

われながら駄文ですな……

読んで下さった方

ありがとうございます

評価など付けてもらえるとうれしいです。

翌日。

いつもと変わらずに登校するも、頭の中は昨日の出来事でいっぱいだ。

心ここにあらずで授業を終え、友達ともあまり話さずに下校の時間を迎えた。

家に向かう道でも考えるのは同じこと。

（僕は一体何を求めているんだろう・・・？）

少し細い路地に入る角をまがる。

その時だった。

「ちょっといい？」

「……僕？」

少年はあたりを見回してみうが、周りに他に人影は無い。

少年に声をかけたのは、少年より頭一個分以上大きい、見たところ高校生くらいのメガネをかけた真面目そうな青年だった。

「…なんでしょうか？」

「君、昨日チンピラとやり合ってたよね？」

「！」

思いもよらない言葉に身を固くする。

（まさかチンピラの仲間とか）

「そんなにこわばらないでよ。別に君をどうこいつしよってんじやないよ」

そう言われ、少し肩の力を抜く。

しかし、チンピラの仲間じゃないとしたら、一体何の用で自分に近づくのか。

少年には見当もつかない。

「ねえ君3年生だね？もう高校は決めてる？」

「え…い、いえ」

（この人は何を考えているんだろうか？）

「ならさ椎名学園つてどこ入る気ない？」

椎名学園。私立の中でも入りやすくて人気なところだ。

しかしレベル的には中の上ほどなので簡単に入れるわけではない。まあ少年の学力ならあと少し勉強すれば合格は確実だろう。

「勧誘ですか？…部活とかの」

「違うよ」

きっぱりと否定され、少しひるむ。

「そつちじゃない」

（そつち？ほかに何があるのだろう？

まさかこの程度の学力じゃあ勉強でのって言うのは無いはずだ）

「君さ椎名学園について、何処まで知ってる？」

「え？」

知っていることと言えば、印象に残っているのはあのことだが。

「生徒会が誰だかわからないっていう……のが印象に残ってますが」  
「それを知っていればいいんだ。よかった」

さっぱり意味が分からない。

（本当にこの人は何が言いたいんだろう？）

「おれが生徒会長だよ」

「……え、へ？」

生徒すら知らないはずのこと。

もしこの人が本当に生徒会長だとしても自分にばらす意味がない。  
それともただのウソツキか。

だが少年にはこの青年の言っていることが嘘とは思えない。

それどころか、さっきから自分の中が熱く感じる。  
血がたぎっているような。

自分には何の血も入っていないのでそんなことは無いが、胸の興奮  
が収まらない。

「なんでそんなことを僕に言っんです？」

「君にね、次の生徒会長になってほしいんだ」



## 5 (後書き)

評価などしてもらえるところうれしいです

（え？僕が生徒会長？）

なにかの聞き間違いだと思った。  
いやそうに違いないと。

「冗談…「冗談じゃないよ」

「俺が卒業したら、やってくれない？無理にとは言わないけど」

「そ、そんな柄じゃない」

青年は少し笑むと少年の目の高さまで腰をかがめて言った。

「おれだつてそんな柄じゃなかったけどさ、いろいろあつて前の人から受け継いだんだ。結構大変だけど、楽しいよ。事務的なことほとんどしなくていいし」

「まあ、いざこざはあるけどね」

「いざこざ…？」

（そっちの方が大変そうじゃないか）

（でも…この、体中が熱いのはなんだ？）

「どう？やってみない？」

「……」

「君の求めていたのって、こついのじゃないの？」

「!？」

（僕の求めていたもの……）

少年は青年を見つめたまま固まった。

目の前の青年にすべて見透かされているようだった。

しかし、言われたことに向き合って、自分を否定できなくなった気がした。

（僕の求めていたものは、こついう、普通とは違う、日常。喧嘩をするようなのじゃなくて、ただみんなと違うことがしたかったんだ。これが僕にとつての求める非日常！）

「やります」

「!？ほんとかい！」

青年もそんなにすんなり受けしてくれるとは思っていなかったのだらう。

目を見開いて嬉しそうに少年の顔を覗き込んできた。

「はい。それで、僕は何をしたらいいんでしょう？」

「うん。まずは普通に高校に合格してくれないとね。そしたらいろいろ教えてあげるから」

「わかりました」

「あ、後。俺のことは誰にも言わないでね」

「わかってます」

少年の人生が、大きく変わった瞬間だった。

現在

「なあ、和人？」

「おい！和人！」

「うあ！？ああごめん」

「何考えこんでんだよ、まさか好きな子でもできたのか！！そうなんだな！」

「まさか」

目の前にある、親友、翔の笑顔を、とても眩しく感じた。



## 6 (後書き)

なんか変な感じで終わってしまった。。

評価など付けてもらえるとうれしいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7451n/>

---

学園内最強組織～the past～

2010年11月13日14時11分発行